

大谷石 国内外に活路

宇都宮市の特産品「大谷石」の持つ魅力が今、国内外から注目を集めている。横浜市では、大谷石造りの教会が生み出す歴史的な景観を生かし、まちづくりにつなげようという動きが進められているほか、飲食店や商業施設が相次いで内装材に使用。採掘量や採掘業者の減少が進む中、新たな活路に期待が高まっている。

歴史的景観 ■ 飲食店の内装

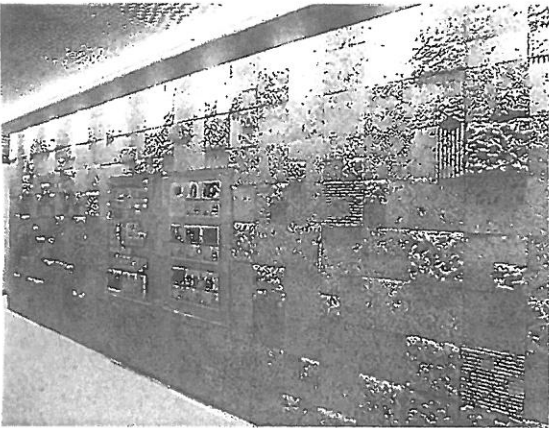
大谷石は石扉や蔵などに使われ、1973年には年間約89万トが生産された。その後はコンクリートや安価な外国産建材に押され、昨年は約1万3500トと減少。採掘の苦勞に採算が

見合わず採掘業者も年々減り、ピーク時は100業者を超えていたが昨年は9業者まで落ち込んだ。そんな中、大谷石をまちづくりを生かそうとする動きがある。1931年建築

で横浜市の歴史的建造物に認定されている教会「横浜山手聖公会」は、聖堂の外壁の仕上げ材に大谷石を使用しており、今年4月から大谷石の施工や加工を行う大谷石産業(宇都宮市)によって修繕と補強工事が進められている。石造りの建造物の改修は高度な技術が必要で、ノウハウを学んでもらおうと、先月24日には横浜市が見学会を開催。建築関係者ら約40人が訪れた。同市では、歴史的景観を形成する建造物の保全活用をし、歴史を生かしたまち



①ニューヨークの大戸屋。カウンター周りには大谷石が使用されている②「まるごとっぽん」のエレベーターホールにも大谷石が使われている



づくりを進めている。横浜山手聖公会の工事終了後の7月に、同教会の聖堂で開かれる市民向けセミナーには、大谷石の関係者もパネリストとして参加予定だ。その独特な風合いから大谷石は近年、内装材としての活用も増えている。外食大手の大戸屋ホールディングスは昨年オープンしたニューヨークの店など「大戸屋」数店舗で、カウンターの周りや床に大谷石を使用。設計業者から「硬くも軟らかくもなく時間を経る中で表情を変える。飲

食空間との相性は抜群」と説明を受け、社長自ら採用を決めた。同社の担当者は「大谷石は『和』の空間とよくなじみ、現地の外国人にも好評」と話す。昨年末東京・浅草にオープンした商業施設「まるごとっぽん」でも、エレベーターホールや柱に大谷石が使用されている。大谷石産業の飯村淳営業部長は「様々な場面で大谷石が親しまれるようになりうれしい。これからも多くの人に魅力を伝えたい」と話している。



工事中の横浜山手聖公会の見学会に訪れた建築関係者ら(いずれも大谷石産業提供)